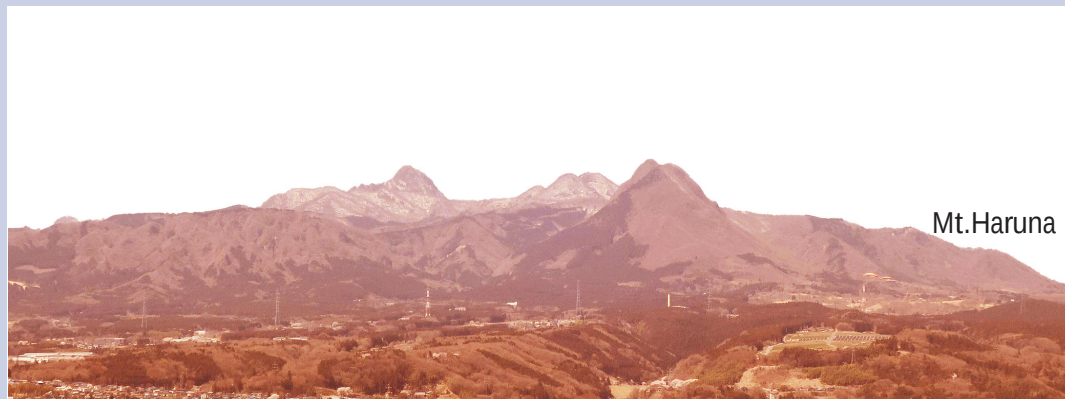




Mt. Haruna

リカバリー

recovery

中

奪還



八重野 充弘

ツピー、ツピー、ツピーというシジュウカラの鳴き声が聞こえてきた。ダイニングの壁掛け電波時計は十二種類の鳥が時を告げる。針は午後三時を示していた。幼児を連れた客はもう二組しか残っていない。

やっと我に返った鋼介は、ぬるくなった野菜のスムージーを音を立てて飲み干すと、ゆっくり立ち上がった。

「鋼介先生、だいじょうぶですか？」

すぐ後ろにテン子が立っていた。鋼介は慌てて返事をした。

「あ、ああ。ちょっとぼんやりしていたようだ。出張から帰ったばかりで疲れが残っているのかな」

「さっきの人、」

「ああ、なんだか人違いのようだ。まったく話が通じなかったよ」

「そうなんですか」

テン子はそういったものの、鋼介の返答に納得してはいない様子だった。二人のやりとりがすべて聞き取れたとは思えないが、第三者の目には、驚き、とまどう鋼介と、自信たっぷりの態度を示す相手とが、くっきり対比されて映ったことだろう。相手の優位性は否定できない。そのことはともかく、「徳川幕府の御用金」という言葉を、テン子が聞き取っていたとしたら、いった

いどう思うだろう。そのことが気になってしかたがなかった。

スタッフルームに戻った鋼介は、隣り合う代表室をノックして、陽香に早めの帰宅を申し出た。疲れ気味だからという理由で。

スクールを後にすると、湿った空気を裂いて鋼介はバイクを走らせた。世田谷通りを西へ進み、多摩水道橋を渡って川崎市へ入る。彼の住むワンルームマンションは、多摩区の高台にある。天気の良い日は新宿副都心の高層ビルがよく見えるのだが、今夕の視界は悪い。

三階建ての鉄筋コンクリートのマンションの階段を一步一步踏みしめて登り、最上階にある自室のドアを開けると、ヘルメットを入り口の棚に置き、廊下の明かりをつけた。そして、奥まった十畳ほどの部屋のベッドの上に仰向けに倒れ込み、じっと目をつぶった。

（何者なのだ、あの男は。どうしてあのことを知っている？）

先刻から何度も自問しているが、答えは見つからない。

（四十七年も前のことじゃないか。あの歳恰好だと、直接知っているはずがない）

悪寒がする。のどの渇きも覚えたが、たった二、三步の距離にある冷蔵庫に近づくことさえも億劫だった。

ほとんど眠れないまま一夜が明けた。夜半に降り出した雨が強さを増している。湿度もさらに上昇しているようだ。それに同期するように、鋼介の体も気持ちもじっとりとしていた。初めは小さく形もあやふやだった疑問のかたまりが、しだいに膨張してきて、おぼろげに輪郭をもち始

めていた。

（あの木箱の中身はいつたいたんだっただろう）

謎の発端はそこにある。あのとき、石ころだったといわれて疑問を抱いても、真実を知る手立てがなかった。受け入れられない気持ちのほうが大きかったにもかかわらず、両親の死という思いも寄らない事態に遭遇したうえに、実態のわからない厚い壁に阻まれて動きようがなかった。努めて忘れようとしただけで、長い間胸の奥でくすぶり続けていたのだ。それが今、灰を吹き払ったあとの燠おきのように、赤黒い光を放ち始めている。

（やつぱり、石ころではないなにかが入っていたにちがいない）

そうでなければ、あの男が自分に近づいてくるはずがない。確かに、「徳川幕府御用金」という言葉を口にした。四十七年前、自分が見つけたのがただの石ころだったのならば、いまになってコンタクトしてくる理由がない。あの男が単なる使い走りかどうかはわからないが、背後に当時の事情を知る何者かがいる。そして、その人物は、あれが終わりではなく、まだ続きがあることも知っている。狙いは第二のターゲットにちがいない。

群馬県警の本部長室で会った初老の男の顔が思い出された。あのとき六十前くらいだったから、生きているとしたらとうに百歳を超えているだろう。二人の短いやりとりの中で、片品の発掘以外のことを話した覚えはない。第二のターゲットについて知っているのは、自分ともう一人。そしていま、あの場所に近づけるのは自分だけ。だから協力を求めてきたのではないか？

まだ真相はわからない。しかし、あの額田という男は必ずもう一度接触してくる。そのときにどう対応すべきか、まずは自分の胆はらを決めておかねばならない。

翌朝、鋼介は午前八時前にはスクールに着いた。いつもの時刻だ。雨の日でもブーツを履き、レインスーツを着てバイクで通勤する。長い年月を南米の小さい静かな村で過ごしたからだろうか、混み合う電車での通勤など考えられないことだった。乗用車で渋滞する道路を走るのもごめんだ。乗り物は自由のきくバイクか自転車に限る。

スクールに着いてからも、気鬱の状態は続いた。ところが、青天の霹靂とはこういうことをいうのだろうか、四十七年前の苦い記憶を呼び覚まされたばかりだというのに、その日のうちに、長年知りたかった真実の手がかりをつかむことができたのだ。

午後二時ごろにかかってきた電話の主は、四日前の女性だった。警視庁総務部広報課所属の星ほし野純代のすみよは、電話口に出た鋼介に対し、まず自分は警察官ではなく警察行政職員であること、また、仕事とは関係なく、父親に頼まれてまったく私的な用件で連絡をとったと説明した。警戒心を解かせる配慮があつたのかもしれない。額田史朗のようにいきなり来訪するような強引さもないし、ふと、会うべきだという直感から、当日中の来訪を受け入れることにした。

午後四時過ぎ、星野純代はスクールのスタッフルームを訪ねてきた。中肉中背で年齢は五十歳前後に見える。鋼介は紺の制服に身を包んだ女性を想像していたが、明るい草色のツーピース姿

で、ほとんど化粧っ気は感じられなかった。

この日は火曜日。休暇を取ったのだという。彼女にとつて、それほど大事な用件なのだろうか。鋼介はカフェへ案内し、彼女のためにスムージーと冷たい麦茶を注文した。悪天候のためか、客は五人しかおらず、あいていた隅の丸テーブルに向かい合つて腰を下ろした。挨拶を交わした後、純代は運ばれてきたスムージーをひと口含み、細い目を可能な限り見開いて、「おいしいです」と感想を述べた。そして「早速ですが」と前置きして切り出した。

「いまから四十七年前、群馬県利根郡片品村でなにかの発掘調査をされていた桜場鋼介さんにま
ちがいありませんよね」

昨日の額田よりもむしろストレートな物言いに、鋼介は一瞬たじろいだ。否定する理由は見
つからなかった。

「え、ええ。そうですが」

「よかった」

純代はテーブルに両手をつき、額がくつつくくらいに白髪が混じり始めた頭を垂れた。そして、
くつと音がするほどすばやく顔を上げると、はつきりとした口調で言った。

「私は片品村の生まれです。父は、駐在所に勤めていました」

鋼介がなにか言おうとしたが言葉にならない。純代が代弁した。

「そうです。あなたを逮捕した警察官です」

鋼介は純代の顔をじっと見つめた。まだ言葉は出てこない。純代が続ける。

「実は、定年退職した二十年ちよつと前、父は桜場さんのお名前を出して、消息がわからないものかと私に相談してきたのです。警視庁に入って七年たっていましたから。八方手を尽くして調べましたが、当時はわかりませんでした。父に報告すると、いったんは諦めていたようですが、二年ほど前に体調を崩し、検査してもらったところ、末期の肺ガンだとわかりました。それから私も月に一度は見舞いに帰るようになっているのですが、半年くらい前でしようか、また桜場さんのことを口にしたのです。そこで、もしかしたらと思ってインターネットで検索してみました。月に何度か調べてみましたが、ずっとダメでした。父の病状は悪くなるばかりですから、なんとかしたいと思いましたが、どうにもなりませんでした。ところが、先週末、まだ四日前のことです。突然検索エンジンにお名前が表示されたのです。ありふれたお名前ではないので、当たりを確信したというわけです」

「お父様はどうしてまた、そんなに気にかけていただいているのでしょうか？」

「はい、私もそう思って、理由を尋ねたのです。すると、ときどき咳き込みながら、話をしてくれました」

いつもより静かなカフェの片隅で、星野純代は父から聞いた昔の話を語り始めた。

一九七二年三月十二日の午後――

片品村鎌田の駐在所の警察官・星野良一^{ほしのりよういち}、当時三十五歳は、少し年長の地元猟友会のメンバー二名の協力を得て、山間部を搜索していた。県警本部から指令が出たのは二日前のこと。沼田市寄りの白沢村で、極左グループのリンチの犠牲となった三名の遺体が発見された直後だ。山中にまだ残党が潜んでいる可能性があった。幸いというか、ここは県内でも積雪の多い地区だから、比較的搜索はやりやすい。車の走行が可能な林道を進み、怪しい足跡を見つけたらトレースすればよい。

その日は一〇〇〇ccのミニバトの前輪にチェーンを装着し、利根村から白沢村にかけて国道一二〇号沿いの山道を一本一本つぶしていった。東洋のナイヤガラといわれる吹割^{ふきわれ}の滝で引き返し、県立尾瀬高校の手前から左折して花咲^{はなさく}地区に入った。ここが当日最後の目的地。すでに夕闇が迫っていた。花咲には冬場にスキー客が利用する民宿が何軒か点在する。経営者のすべてと星野は顔見知りだ。そのうちの三軒たずね、安全を確かめると、猟友会メンバーにねぎらいの言葉をかけて一緒に車に乗り込み、来た道を戻りはじめた。

そして、鎌田へ通じる峠越えの山道との分岐点にさしかかったときだった。星野ははっとしてブレーキを踏んだ。車は停止したが、後輪がスリップして車体が大きく右に振れ、後部座席の二人が悲鳴を上げた。

この山道は狭くてカーブが多く、危険だから冬期はほとんど利用されない。しかもいまは積雪のピーク時だ。にもかかわらず、雪に半ば覆^わわれた轍^{わだち}が残っていたのだ。下車してよく観察する

と、午前中の、それとかなり早い時間につけられたとみられた。これは捨て置けない、轍をたどるしかない。すると、宇条田峠うじょうたの手前で白いワンボックスワゴンを発見、それが無人であることを確認すると、ライトを点灯して三〇センチ以上は雪に埋もれた道路にかすかに残る足跡をたどり、慎重に歩を進めていった。時刻は午後七時を回っており、あたりは闇に包まれていた。

峠にさしかかったとき、前方にランタンの明かりがぼうつと見えた。人影はない。星野が先頭に立ち、身をかがめて明かりのほうに近づく。穴が見えた。直径二メートルほどか。五メートルの距離まで近づいて様子を見た。音がする。ガサガサと、なにかを引きずるような音だ。そして突然、ガシャツという衝撃音が響いた。二度目の衝撃音を耳にしたとき、星野は飛び出した。穴の縁に立ち、ライトを下へ向けた。

「なにをしている、そこで！」

穴の底に、アノラックに身を包んだ男が一人、ツルハシを手に呆然と立っていた。後続の二灯のライトに目がくらんだようで、片手を汗まみれの額の上にかざした。二つの銃口も目に入っているとみえ、抵抗する様子はなかった。

「上がつてきなさい」

星野の言葉に、男は無言で従った。年齢は二十代前半か。県警本部からの通達にあった要注意年代層に合致する。

「良一君、あれは？」

獵友会の男が穴の底を指して叫んだ。古ぼけた木箱が一つ転がっている。

「身柄の拘束が先です。現場を洗うのは後にしましょう」

星野の判断で、現場はそのままにして、雪がちらつく中、若者を含む四人は駐在所のミニバトで引き返した。こんな天気だから、現場に近づく者などいるはずがない。

駐在所での取り調べに、若者はときどき首を傾げながらも素直に応じた。氏名、生年月日、大
学名、出生地、現住所などがわかると、星野は県警本部に逮捕時の状況とともに報告を入れた。
一時間半ほどたつて県警のパトカーが到着、若者の身柄は前橋に送られた。時刻は午後十一時を
回っていた。現場の検分は翌日に行うことにして、星野は獵友会の二人に再びねぎらいの言葉を
かけて見送った。

遅い夕食をすませ、ふろを浴びてやつくつろぐことができたのは日付が変わったころ。する
と、真夜中に今度は県警から電話が入った。出たのが景山本部長だったので驚いて応対すると、
明朝、現場には自ら出向くという。星野はなんの疑いもたなかった。白沢村のように遺体が掘
り出されでもすれば、事態はさらに深刻化するから、本部長が自ら動くことに不思議はない。

翌朝八時、雪はやんでいた。鎌田側の国道一二〇号から宇条田峠へ向かう山道の分岐点で星野
が待っていると、黒塗りの車が一台やってきた。前の座席には運転手と中年の制服警官が一人、
後部座席には以前に一度か二度見たことのある景山本部長の顔があり、その隣には見たこともな
い初老の男が座っていた。

穴の底にうつすらと雪が積もっているほかは、現場は昨夜のままだった。制服警官とともに景山が先に穴の縁に立って中を覗き込み、すぐに後ろを振り向くと、初老の男を抱きかかえるようにして案内した。

「お気をつけください」

男は短軀で、借り物と思われる防寒具を身につけていたが、おそろしく不格好だった。すぐに、木箱を上へ上げるよう指示し、制服警官がそれに従った。木箱には金属製の錠前のようなものが付いていたが、壊れている。昨夜、若者を逮捕する直前に聞いた衝撃音は、これを破壊したときのものかもしれない。男がふたを持ち上げると、簡単に開いた。星野も、中になが入っているか大いに興味があったので脇から覗き込むと、出てきたのはこぶし大のただの石ころが十個ほど。拍子抜けする結果だった。

星野は、なんとなく諦めきれない思いがして、穴の奥を覗き込んだ。

「やつ、同じような木箱がまだたくさんありますよ」

穴の壁の片側には丸太を組んだ枠があり、一部にすきまがあいていて、木箱が積み重なっているのが見えた。男の指示で制服警官が穴へ降り、奥からさらに二個の木箱を引きずり出した。同じように隅々が金属で補強されていて、錠前がついている。置きっぱなしになっていたツルハシでたたくと、錠前はもろくもはじけ飛んだ。八つの眼が一斉に木箱に注がれる。開けると、やはり中身は石ころだった。もう一つも同じ。だれからともなく溜息が漏れた。全部で十六個の木箱

が引きずり出されたのは、それからおよそ十五分くらいたったところ。すべて錠前がたたき壊され、ふたが開いたが、結果はすべて同じだった。すると、

「ちよつと調べさせてくれ」

男は制服警官を上がらせ、そろそろと穴に下りていった。ツルハシを手にしゃがみ込んで、木箱が置いてあった場所をその先でひっかけ、なにか手応えがあったのか、目の色を変えて上がってきた。そして穴を離れると、景山を手招きしてなにやら耳打ちした。本部長は何度か首を縦に振ると向き直り、命令を下した。

「ようし、あとはこの方が調べてくださることになった。いったん撤収だ」

星野は一瞬（えっ?）と思った。男がだれで、どういう立場で現場を調べるといのか、まったく知らされていない。だが、本部長命令であれば従うしかない。

「わかりました。私にお手伝いできることはなにか?」

「そうだな、国道からの入り口付近に、地元民以外の立ち入りを禁じるよう、表示を出すとか、工夫をしてくれ。調べが終わるまでは、そこでの監視も必要だな。応援がいるだろうから、沼田から出してもらうよう手配をしておく」

「はっ、承知しました」

そんなやりとりの後、全員が現場を離れることになった。

その日の全国紙の夕刊を見て、星野はぎよつとした。

—— 片品村山中で極左グループの残党一名を逮捕

集団リンチの犠牲者さらに増えるか

(ちよつと待てよ)

星野は強い違和感を覚えた。若者を逮捕したときは確かにその疑いがあつたが、取り調べの際の若者の様子や現場の検分の結果から、疑問を抱くようになった。

(あの若者は連中とは関係ないのではないか。あそこで穴を掘っていた目的は、ほかにあつたようだし)

それなのに、現場の再検分を知らない人間がやるという。自分のあずかり知らぬところで、ことはちがつた方向に動いているような気がしてならなかった。

二日後、天候はすっかり回復した。気温はまだ低いが、しばらく雪の降る心配はないだろう。午前中に、いずれも東京の品川ナンバーの高級乗用車一台とワンボックスワゴン二台が現場に到着した。乗用車には本部長が連れてきた初老の男と世話役のような若い男三人が、ワゴンには土木作業員風の男が十人近く乗っていて、作業用の道具と資材も積まれていた。

翌朝、星野は朝刊を見てまた目を見開いた。逮捕した桜場鋼介の両親が、一酸化炭素中毒死したというのだ。記事の自身を読むと、事故か自殺か判断できないと書かれていた。星野はいても立ってもいられず、県警本部に電話して、鋼介のその後の扱いについて尋ねた。しかし、送検され取調中ということだけで、詳しいことは教えてもらえなかった。

（まだ極左グループのメンバーという疑いは晴れていないのだろうか？）

もし、警察が事実とちがう発表をして、マスコミも誤った報道をしたのだとしたら、亡くなった両親はもちろん、本人も気の毒だ。星野は頭を抱えたが、自分にはなにもできない。

それから七日間、星野は現場に近づけなかったので、その間になに行われていたのか、まったくわからなかった。県警本部からの連絡で検分が終了したことを知らされたが、内容に関しては一切報告がなかった。急いで現場へ行ってみると、穴は埋め戻されたうえに、跡がわからないようにきれいに整地されていた。

「拘留期限ぎりぎりの十日後に、桜場さんが釈放されたことを、父はしばらくたってから知ったそうです。ほっとしたもの、その後桜場さんがどうされたかまでは調べようがなく、ずっと気にしていたのです」

星野純代の長い話が終わった。少し涙ぐんでいるように見えた。鋼介も胸がいつぱいになっていた。

「ありがとうございます。おかげで、ぼくがずっと知りたかったことが、まだぜんぶではありませんが、かなりわかってきました。お父様には、ぼくが元氣にしていること、あれからいろいろありました、周りの人々のおかげで、いまはとても充実した日々を送っていることをお伝えください。ご安心くださいと。それから、どうぞお体をお大事にと」

鋼介も、最後には声の震えをおさえることができなかった。

純代は深々と頭を下げ、いとまを告げた。その後ろ姿に、心からほっとした様子がうかがえた。(額田という男が、もっと詳しい事情を知っているはずだ。次に接触してきたときに聞き出す手立てを考えておかなくては)

鋼介はいっそうの覚悟を決めた。そしてその機会はすぐにやってきた。

翌日の夕刻、スクールの門の前の路上に、一台のグレーのセダンが停まっていた。空はどんよりとしていたが、雨は降っていない。そろそろ梅雨明けが近いのかもしれない。鋼介がスクールの玄関から駐車場のほうに向かおうとしたとき、地味なスーツの男が車から降りて頭を下げた。額田史朗だ。鋼介もすぐに気がついて、自ら近づいていった。

「考えていただけましたでしょうか」

直立した額田史朗が、慇懃無礼な態度で言った。鋼介は相手の目を見据えた。なにをどのくらい知っているのか、読み取ろうとしたが、歳のわりには固いガードを身につけているようで、見抜けなかった。そうなると、相手の懷に飛び込んでいくしかない。

「ぼくに協力して欲しいと言ったよね」

「はい、申しました」

「なぜぼくなのか分からない。ぼくがあなたの、いや、あなたのバックにいる人の役に立てるとは思えない。だって、なんの実績もないんだから」

額田はすぐには答えず、じっと見つめ返してきた。今度はこちらが胸の内を探られる番に回ったようだ。しばらくの後、相手は口を開いた。

「あなたの頭の中にあるのは、本件の出発点となった出来事のことでしょうね。となると、どうしても私の見かけの年齢との間にずれが生じる。だから、私のバックにだれかがいると思われるのですよね」

そこで、額田は目を細めた。あまり気持ちのいいものではなかったが。

「おかげさまで、あなたが、私が探していた方にまちがいないことがはっきりしました」

鋼介の口元もゆるんだ。

（なるほど、そのとおりだ）

こちらが察知している部分をちらつかせて、優位に立つのが狙いだったが、相手に確信をもたせる効果しかなかったかもしれない。

（まあいい、覚悟を決めたのだから）

すると、相手はあらかじめ用意していたと思われる言葉を口にした。

「ご推察のとおり、これは私が個人としてお願いしていることではありません。私はある方の意向に従って行動しています。そこで、今日は二回目ですから、どこまでお話ししてよいか、その方に伺ってきました」

額田はそこで言葉を切った。鋼介は黙っていることで話を聞く意志を示した。

「私どもは桜場さんを実績のある方だと認識しています。不思議なことです、その点に限って言えば、ご自身よりも私どものほうがずっと事情を承知しているようですね」

「ほう？」

「申し訳ありません。それに関してはこれ以上詳しいことは申せません。それともう一つ、お伝えしなければなりません。桜場さんが辿り着いたのはあれだけではなく、ほかにもあったということを私どもは承知しています。この二点をご説明することで、私が桜場さんをお訪ねして、このようにお願いしているわけをご理解いただけるのではないかと思います」

先ほどまでは無風だったが、頭上のケヤキの枝が揺れて音を立て、湿った空気が鋼介の頬を撫でた。じつと腕組みをして思考を巡らせた。どうやら分析は正しかったようだ。

「協力しろということは、主体はそちらだと言いたいわけかな、額田さん」

鋼介は皮肉を込めて言った。

「それはこれからのお話し合いによつて。もちろん、十分に御礼はするつもりです。なにか条件のようなものがありましたら、遠慮なくおっしゃってください。承って持ち帰ることにしておりますので」

（条件ときたか）

鋼介はわずかに口をとがらせた。

「悪いけど、まだ気持ちの整理がつかないんだ。もう二、三日考えさせてくれないか」

額田は大げさにうなずいた。

「けっこうです。それくらいならお待ちしますので、ご検討ください」

今日は大きな進展があったと、手応えを感じているのだろう。満足げだった。

「先日お渡しした名刺に携帯の番号がありますから、よろしければお電話いただけませんか。もし、二、三日たつてご連絡いただけなかったら、またこちらからお伺いします」

「たぶん、ぼくのほうから電話をすることになるだろうね」

「ありがとうございます。楽しみにお待ちしております」

額田は深々と頭を下げると、運転席のほうへ周りドアを開けた。そこで一度振り返り、声のボリュームを上げて言った。

「四十七年前に見つけられたのは、たいへんなものだったんですね」

鋼介は返答せず、その言葉を噛みしめた。コロンビア移住者の中で最も成功した辻壺之助氏の邸宅にあった小判が目に見えた。

（たいへんなもの。小判一万六千両か）

ドアの閉まる音に続いて低いエンジン音が路地に響き、車は五〇メートルほど直進したあと左折して、住宅の生け垣の向こうに消えた。すると、まるでそれを追うように、一台のバイクが右側の路地から出てきて左へ消えていったのを、鋼介は視界の中にとらえた。黒い影が二つ、その背にへばりついているように思えた。

額田史朗が帰り際に残した言葉は、それからしばらく鋼介の耳の奥で反響をくり返していた。翌日、生徒たちから提出された新しい研究テーマに目を通したあとも、デスクでひとり思索の時間を過ごした。蒸し暑さがいちだんと増したようだ。ポロシャツの上から二つ目のボタンを外した。

（餌を撒いたつもりか）

木箱の中身がほんとうはなんだったのかを知りたい一心で、自分が話に乗ってくることを相手は読み切っている。だったら、餌に食いついてやろうか。食いついて釣り上げられても、こちらにはなにも失うものはない。もともと得たものがないのだから。逆に向こうの狙いははっきりした。第二のターゲットを手に入れることだ。それがなにを目的としたものかはまだわからないが。相手の見込み通り、こちらはその場所を知っている。すでに四十七年前から。ただ、自分以外にもう一人キーマンがいる。

（やはり、ヤツが絡んでいるのだろうか？）

向こうが核心に迫る情報をつかんでいるとしたら、それしか考えられない。

もう日本人のほとんどが忘れてしまっていることだろう。事件そのものを知らない世代も増えた。南軽井沢の保養所立てこもり事件から三年後の一九七五年八月四日、マレーシアの首都クア

ラルンプールでそれは起こった。

日本の極左グループはいくつかのセクトに分かれ、手を結んだり解体したりしていたが、中東を拠点としたテロ組織の五名が、アメリカとスウェーデンの大使館が入ったビルの上階を占拠し、約五十名の職員を人質にしたのだ。そして、人質解放の条件として、逮捕され服役、収監中の仲間七名の解放を要求した。日本政府はこの要求をのみ、解放を辞退した二名を除く五名を国外に逃がした。

この事件を鋼介はコロンビアで知った。地元でも大きく報道されたからだ。解放された五名の顔写真も掲載された。その中に、絶対に忘れることのない顔を見つけて、鋼介は戦慄した。南軽井沢事件の逮捕者が含まれていたとは！

それから四十四年が過ぎ去った。生きていかどうかもわからないと思っていたが、鋼介の頭の中ではクリアな像を結んでいる。ただし、四十四年前の二十五歳当時のまま。折しも警視庁は最近、その男を含む国際手配中の七名の似顔絵を発表した。交番などに貼ってある手配写真が古すぎて意味がなくなってきたからだ。時が止まったままの別世界にいるのならともかく、みんな確実に歳を重ねているはず。それを想定して描かれたものだ。似顔絵は警視庁のホームページなどで公開され、七名は国内に潜伏している可能性もあると結んでいるが、はたしてそうだろうか。過去にも海外に潜伏していた極左グループの大物で、帰国に成功したのはいるが、結局は逮捕されている。日本の公安警察は世界に類をみないほど優秀だから、ヤツが不法入国して国内にいる

ことは九十九パーセントあり得ない。しかし、情報だけがなんらかのルートで、ヤツから額田らのグループへ流れているのは確かだ。

そこはたまたま見つけた場所だった。一九七二年の二月初旬。午後の早い時間だったと記憶している。妙義町にある十世紀半ばに創建された菅原神社を調べた後、鋼介は妙義山の東山麓を縫うように走る「妙義有料道路」をバイクで北上していた。北側の日当たりのよくない路面には、いくらか黒ずんだ残雪がへばりついていたが、用心して走ればスリップする危険は少なかった。外気温はおそらく零度を下回っていただろう。しかし、よく晴れた日で見通しはよかった。

上り坂の比較的長い直線に入ったとき、一瞬、視界に黒くて四角いものが入ってきた。急停車し、左後方をふり返った。洞窟の入り口のようなだった。枯れ草の間から闇がのぞいている。高さも幅も一メートルほど。岩盤をほぼ正方形にくり抜いた、いかにも人工的な感じの入り口だった。脇に入り口と同じ形をした薄い岩が立てかけてある。蓋のように見えた。

（なんの穴だろう）

自分が探しているものとの関連はなさそうだと思いつつも、念のために鋼介は写真を撮ることにした。記録することの大切さは民俗学の調査と共通している。現場では目にとめなかったのに、あとになってはっと気がつくことがある。そのもとになるのが写真やスケッチ、メモだ。そのためのツールを必ず携帯する。このとき彼がズボンの後ろポケットから取り出したのは、前の

年に発売された新型カメラだった。一六ミリ幅のカートリッジ式フィルムを使用するもので、とにかく小さくて軽く、フィールドワークに最適だ。ワンカットだけ、入り口の写真を撮ると、鋼介は身をかがめて中に入ってみた。これも常に携行している小型のライトを前方に向ける。中は立って歩けるほどの高さがあり、幅も二メートルはゆうにあつた。鉱山の跡だろうか。腐葉土と苔の匂いが混じった生暖かい空気が鼻から入ってきた。外気温との差は二〇度くらいはあつたかもしれない。厚い防寒具を脱ぎたくなるほどだった。

鑿^{のみ}の跡が残る壁を伝い、ゆるいカーブに沿って左奥へ進み、十数メートル入ったところではつと息をのんだ。明かりが見えたからだ。

「サカグチさんか」

奥から男の声がした。足音が聞こえたらしい。鋼介は声も出せず立ちすくんだ。

「ここはアカン。スペースは十分やけど、道路からあまりにも近すぎるし、出入り口が一カ所しかなく狭いのが致命的だ。追いつまれたら逃げ場があらへん」

関西弁だ。鋼介は固まったまま思考をめぐらせた。

(もしかして、こいつ)

武力革命を目指して非合法の闘争を行う、学生を中心とした極左グループが、警察のローラー作戦によって首都圏のアパートを追われ、北関東の山中に逃げ込んでいるらしいことはニュースで知っていた。その一味かもしれない。幸い、相手はまだ鋼介を仲間と思っっているようだ。この

まま引き返して逃げたほうがいいと思ったが、体のほうが動かない。まごまごしているうちに、男が近づいてきた。光の束が鋼介を襲う。とっさに顔を隠したが無駄だった。

「だれや！ サツか？」

胸のポケットから、ギラリと光るものを取り出してこちらに向けた。

「待ってくれ、警察じゃない。オレも学生だ」

やっとの思いで、鋼介はそれだけの言葉を絞り出した。鋼介の揺れるライトの明かりに、相手の顔が浮かび上がった。

「キミは！」

まちがいない。ひと月ちょっと前、榛名湖の近くで出会った若者の一人だ。上目遣いのぞっとするような冷たい眼が忘れられない。あのときは相手に対して危険は感じなかったが、いまはちがう。場所も場所だし、向こうは武器を手にしている。やり合っても勝ち目はなさそうだ。刺激してはまずいと考え、鋼介は両手をだらりと下げ、無防備をアピールした。相手のライトの光の輪が、鋼介の体にまわりつく。

「ケイ・エスカ」

鋼介の防寒具の胸に縫いつけた大きめの文字ワッペンを、男は読みとった。そしてナイフを下ろし、拍子抜けするほどのおだやかな声で言った。

「会うのは二回目やな。どうやらオレたちとは行動の目的がちごとるようや。キミの狙いはあれ

なんか？」

ライトで指し示した洞窟の奥に、胸のあたりまでの高さがある黒い物体が置かれているのが目に入った。菰こものようなものがかぶせられている。促されるまま物体に近づき、覆っているものに触るとボロボロと崩れた。大量のほこりが霧のように宙に舞った。かなり古い。その下に、四角い箱のようなものが積まれていた。いちばん上の箱のふたが半分開いていて、そこから覗いているものを目にしたとき、鋼介は息をのんだ。

「甲州金だ！」

彼が探していたものではない。しかし、まったく思い当たらないものでもなかった。信頼できる史料が皆無なので信憑性は低く、ターゲットから除外していたものが、どうやら実在したようだ。

甲州金は、戦国時代に武田氏が、領内だけで通用する私鑄貨幣しちゅうかへいとしてつくったもので、碁石のように分厚い露一両金や、たたいて細長く伸ばした蛭藻金ひるもなどがあつた。江戸時代になってからも、徳川幕府は地元の専門業者に金貨の鑄造を続けさせた。それは江戸でつくる小判や一分判金などところがって、武田時代のままの規格を踏襲させ、幕末まで続いた。金を産することが理由だったのだろうか、江戸時代を通して甲斐国は幕府の直轄地で、甲府勤番という役所が置かれていた。そして正式な記録として残っているわけではないが、幕末には甲府勤番に二十四万両の御用金が保管されていたという。それが動乱期にすべて行方不明となり、上州に移されたといわれるが、

これまでに見つかった形跡はない。

「これをどうするつもり？」

鋼介は聞いた。

「相当なお宝やいうのはわかるけど、いまはそこらやあらへん。勝手にせいや」

この場では納得させられる言葉だった。彼らは逃亡の身。それに、銀行強盗をはたらいて得た、かなりの額の現金を持っているはずだ。金貨の使い道はない。

男はナイフをまっすぐ突きつけたまま鋼介の脇をすりぬけ、無言で出口へ向かった。その後ろ姿を見送ると、鋼介は突っ立ったままこれから先のことを考えた。

（警察に通報したほうがいいのだろうか。いや、やっかいなことに巻き込まれるのはごめんだ）

目の前の甲州金には心臓が飛び出るほど興奮してはいるが、気持ちにはほかに向いていた。自分にとつての本命は北方の片品村。江戸から運ばれたものの一部だ。独力で仕掛けを見破り、あとは掘り出すだけ。人や車の通行がない冬期しかそのチャンスはない。妙義へ来たのは、一度見ておきたかった菅原神社を訪ねただけで、洞窟の発見はあくまで副産物だった。

（ここはこのままにしておこう。そして、近いうちに必ず戻ってこよう）

鋼介はもう一度カメラを取り出し、ふたを開けた箱にレンズを向けて、巻き上げレバーに手をかけた。しかし動かない。フィルムを使い切ったようだ。

（残念だがしかたがない）

鋼介は洞窟の外へ出て、入り口に蓋をした。相当の重量があつたが、ずるずると引き寄せてなんとか空間をふさいだ。見事にぴったりのサイズと形で、わずかな隙間に土を詰め枯れ葉をなでつけると、そこはなんの変哲もない岩肌となつた。穴があることが自分でも信じられないくらいだ。

（ヤツはどうやって見つけたのだろう？）

不思議でならなかつた。しかし、たずねようにも、すでにその姿はどこにもなかつた。

後で知つたことだが、極左グループが妙義山中で一時的にアジトにしたのは、裏妙義こもりさわの籠沢にある洞窟だつた。奇岩で名高い妙義山は、いくつかの峰が南西から北東に向かつて二列に並んでいる。西側の標高の高いほうを裏妙義、東側を表妙義と呼ぶ。籠沢は裏妙義の標高一〇〇〇メートルほどの山中にあつた。鋼介が見つけた洞窟は表妙義の金鶏山の麓だから、せいぜい六〇〇メートル程度。県道沿いで、どう考えてもアジト向きではない。そして籠沢の洞窟にもすぐに警察の手が迫り、ヤツらがそこを利用したのはわずか一週間ほどだった。脱出直後、半数が軽井沢駅で逮捕され、あとの半数が山越えをして南軽井沢へ向かつたのだ。

ふと、外に目をやると、グラウンドでは生徒たちが思い思いにスポーツを楽しんでいた。農園の仕事もこれから俄然忙しくなってくる。この時期、雑草も遠慮なく生い茂るが、いろいろな作物が収穫期に入り、昼食のときも旬のものが食卓を飾る。

ほかのスタッフはみなグラウンドか農園にいて、事務の女性も私用で昼過ぎには帰宅したので、部屋にいるのは鋼介一人だった。物音がしたので振り向くと、いつのまにかデスクが生徒に囲まれている。松井秀人、通称ヒデと、ダイチこと竹元大地、それにテン子の三人だった。

「コースケ先生、なにが起こってるの？」

口を開いたのはヒデだ。

「ん？」

鋼介は返す言葉を探したが、三人の真剣なまなざしに気圧けおされてすぐには出てこない。

「深刻な問題なの？」

テン子が聞いてきた。

「きのうの夕方、ほら、ちょいやばい感じの男が」

続けたのはダイチだった。

「見たのか」

特別に好奇心の旺盛な三人のこと、どこかで聞き耳を立てていたらしい。ひょっとしたら、額田との最初のコンタクトを目撃したテン子が、二度目のときは二人を呼び、みんなで盗み聞きしていたのかもしれない。

「なあに、単なる人違いさ」

できるだけ軽い調子で答えた。しかし、三人の追及は執拗だった。

「そうとは思えなかったって、テン子が」

「最初にあの男が帰ったあとのコースケ先生の様子が、普通じゃなかったって」

ヒデとダイチが食い下がる。

「徳川幕府の御用金って？」

「埋蔵金のこと？ 前にも見つけたことがあるの？」

鋼介は目を見開いた。

（やっぱり耳に届いてたのか）

ごまかし通す自信が揺らいだ。

「いやね、これは大昔のぼくの個人的なことで、ほとんど終わってることだし、キミたちにはまったく関係ないというか」

仕方なく、弁解めいたことを言おうとしたが、彼らに通用するはずがなかった。

「コースケ先生、意味不明！」

「らしくないよ」

「隠しことはよくないよ。このスクールらしく、問題が起きたらなんでも話し合わなくちゃ」

矢継ぎ早にジャブが飛んできた。なんとか反撃の糸口を見いだそうと、両手を頭の後ろで組み、目をつぶって椅子の背にもたれかかったが、妙案が浮かばない。すると、ヒデがぎよっとするこ
とを言った。

「実は、きのうの夕方、あの男が帰るとき、ダイチと一緒にあとをつけたんだ」

「なんだって？」

鋼介は声を上げ、体を起こした。一瞬目にしただけだが、男のクルマを追うように発進したのは、二人が乗るバイクだったのだ。鋼介は椅子の背にかけた上着のポケットから手帳を取り出し、中に挟んでいた額田史朗の名刺を見た。

「平河町まで追っていったのか？」

事務所の住所がそこになっていたからだ。ところが、二人はかぶりを振った。

「いや、もっと近いところ。世田谷通りから環状八号を右折して、上野毛かみのげから駒沢こまさわ通りに入り、着いたところは深沢ふかさわ五丁目。日体大の近くだったよ」

ダイチがそう説明し、ヒデがあとに続いた。

「そう大きくはないし古ぼけているけど、けっこう立派なうちだったよな。クルマは半地下の駐車場に入っているって、シャッターがオートで下りたから、男の姿は確認していないけど。あ、表札はちゃんと見てきたよ。同伴の伴という字、ちゃんと読むのかな？」

世田谷区深沢、伴。その地名にも人名にもまったたく心当たりはない。

「しょうがない、きみたちに隠しことはできないことがわかったから、ぜんぶ話すことにしよう。だけど、お願いだから、もう二度と危険なまねはやめてくれ。相手のことがまだよくわからないけど、かなりヤバい連中であることはまちがいない。もしキミたちが見つかっていたらと思うと、

背筋が寒くなるよ」

面倒なことにならずにすんだことには安堵した。だが、彼らの暴走を止めるためにも、この経緯をきちんと説明するしかあるまい。そのうえで、この一件に彼らを巻き込むことのないよう、手立てを考えるほかない。

鋼介がそう心を決めたときだった。スタッフルームのドアが開き、代表の須藤陽香が入室してきた。不思議そうな表情を浮かべて、三人の生徒と鋼介の顔を見た。

「なに？ このシチュエーションをどう解釈すればいいのかしら？」

「代表、ちょっとお話が。キミたち、十五分、いや十分ほどここで待っててくれないか」

鋼介は手で代表室のほうを示しながら、精一杯誠意を込めた顔を生徒たちに向けて言った。三人は素直にうなずき、窓際に近づいてグラウンドのほうへ視線を向けた。

隣り合う代表室に入ると、鋼介は陽香に現在の状況を手短かに説明し、自分の過去のことについて、詳細はオーナーに聞いてほしいと頼んだ。そして、これから生徒たちに話を聞かせるが、彼らの身の安全は責任をもって守ると約束した。陽香は終始目を丸くして聞いていたが、鋼介の対応に同意を示すとともに、一刻も早く詳細を知りたかったとみえ、そそくさと自宅の方へ足向けた。

鋼介が生徒たちにすべてを話す気になった理由は、ほかにもある。一つは、彼らが十代の半ばにして、大人に裏切られ、信用できなくなった気の毒な経験をもつからだ。これ以上、大人の都

合で彼らに隠しごとをしたり騙したりすることがあつてはならない。もう一つは「社会正義」を身につけてほしいこと。これからの長い人生を、人としてまっとうに生きてほしい。世の中の理不尽さにつぶされないうよう、強い精神的基盤をもつてほしい。最近の調査によると、若い世代が、権威や財力を振りかざして驕慢な態度をとる政治家や経営者を、容認するばかりか憧れの対象とみる傾向があるという。格差社会が加速度的に拡大する中で、自分たちが政治の無策の犠牲となる確率が高いことに気づかず、盲目的に権威に憧れる風潮をなんとか是正しなければならぬ。社会はけっして一部の人間のためにあるのではない。誰もが生きやすい社会を実現させるために必要なのは、若い世代がきちんとした「社会正義」を意識し、世の中を動かしていくことだろう。鋼介は自分の身に起こった理不尽な出来事をつまびらかにし、一度は失ってしまったものを取り戻す行動によって、少しでもそのことを知ってもらいたかった。

テン子話すことをためらわない性格だから、鋼介は本人の口からことの詳細を聞いている。彼女は東京都心にある、そこそこ偏差値の高い私立高校に一年も通わないうちに中退した。父親の仕事の関係で、小学校の高学年からアメリカで暮らし、高一の一学期の途中でこの学校に編入したので、クラスの特異な事情を知らなかったのだ。中退のきっかけをつくったのは他者であつて、彼女にはなんの落ち度もなかったのだが、すったもんだの挙げ句、結局問題児の烙印を押されて退学することになったのはテン子のほうだった。

事件は二学期の期末テスト中に起こった。PTAの会長を務める地元の有力者の息子佐川^{さがわ}が、

テン子とクラスで成績のトップを争う美咲みさきから、解答を教えてもらう不正をしたのだ。美咲は、床に鉛筆を落としたふりをして、隣の席の佐川に解答のメモを渡した。テン子はそれを二つ後ろの席から目撃した。テストはマークシート式の教科と、小論文のような記述式のものがあるが、不正はもちろんマークシート式のときだけ。それでも、一学期の期末はクラス三十五人中三十三番目の成績だった佐川は、二学期には十番以内に躍進した。

黙っていられなかったテン子は。ホームルームの時間に、具体的な名前は出さず、テストで不正があったことを訴えた。ところが、クラス全体が思いもよらない反応をした。だれ一人驚かないのだ。美咲だけはじっと下を向いていたが、男子の中には薄ら笑いを浮かべている者もいる。当の佐川も、ふてぶてしい態度でふんぞり返っていた。さらに、担任の若い女教師は真っ向から不正を否定した。

「そんなことはあり得ません。人を貶めるような言葉は慎みなさい」

テン子は食い下がった。

「私、見たんです。不正があったのは事実です」

「どんな証拠があるっていうの」

「調べてください。わかるはずですよ。急に成績がよくなった人の答案と、その隣の人のを照合してみるとか」

ここまで言えば、名指ししているようなものだったが、担任は無視した。クラスがわずかにざ

わついているように感じたが、多くは関わりたくないという態度がみえみえだった。

まもなく、テン子の両親が学校から呼び出しを受けた。予測していたとおりだ。両親にはいささつを詳しく話し、テン子の言い分に理解を示してくれたが、一カ月の停学という処分は予想を超えていた。佐川の父親が学校に働きかけをしたようだった。後で知ったことだが、美咲の父親は佐川の父親が経営する会社の社員だった。美咲が佐川に強要されて仕方なく答えを教えたことは容易に想像がつく。クラスのほかの連中も報復を恐れて口をつぐんでいるのだ。

「あの学校はもう終わっている。停学は無視してこちらから退学してやる」

それがテン子の結論だった。内容証明つきで担任あてに退学届を郵送し、次のように書き添えることも忘れなかった。

「前略。貴校での不正と隠蔽を世間に訴えることはできるのですが、私はしません。バカバカしくて、もう怒る気もしないからです。でも、そういうことを続けていると、いつかは世に知られますよ。ついでお伝えしますと、先生の英語力、とくに発音はお粗末のひと言で、外国では通用しません。一から勉強をやり直されることをおすすめします」

ヒデの場合は、本人から直接聞いたわけではないが、両親とうまくいっていないらしい。ひとり息子の彼は、中三のとき両親の言い争いを耳にした。公務員の父親が、上司の指示に反発したのがことの発端で、結局は指示に従ったものの、地方へ飛ばされる羽目となった。そのことを母親はなじった。やったことは同じなのだから、最初から素直に上司に従っていればよかったのに、

というのが母親の言い分。しかし父親は、重要な記録をだれのためかわからないが、事実に対する記述に書き換えるよう命じられたことに、どうしても納得できず、ギリギリまで抵抗したのだ。もつと若いころにも、それに近いことが一度あったらしい。

それを知ったヒデは、父親の考えが正しいと思った。そして、結果的に不正に手を染めてしまったことを激しく責めた。「許されない行為だ」と。父親はこれに激怒し、「子どもは口出しするな。おまえになにがわかる」と怒鳴った。以来、お互いに口をきいていないという。

その父親は地方に単身赴任。本来は家族で行かなければならないところを、学歴信仰者の母親が息子の進学のことを考えて、二人で東京に残ると言い張ったらしい。ヒデはなんとか一流進学校にすべり込んだままではよかったが、受験勉強に疲れたうえに母親への反発もあって、学校へ行くことを拒否するようになった。

ヒデは自分のことを積極的に話すほうではなかったが、「コースケ語録」というのを作るくらい鋼介の信奉者になったから、過去のことはさておき、いま彼が考えていることや性格はだいたいわかっていいる。とにかく、いろいろなことに興味をもつ子で、なにかに没頭したら簡単にほうりだしはしない。背は一七〇センチ前後で今どきの男の子にしては高いほうではないが、骨格がしっかりしていて、アスリートタイプとっていいだろう。実際、スクールではフットサルチームのエース格である。

好奇心の旺盛さではダイチも負けてはいない。こちらはひょろっと背が高くて、年齢より上に

見える。もう成人しているといっても通るほどだ。スポーツは得意ではないが、機械いじりが好きで、ふた月ほど前、十六歳になってすぐにバイクの免許をとった。また、コンピュータの扱いに関しては当スクールナンバーワンで、他の生徒たちから一目置かれている。

実は、ダイチが中学生になったばかりのころから憧れていた職業は、飛行機のパイロットだった。ところが、中二のとき、プールでの事故で左の耳の鼓膜が破れた。時間をおかず鼓膜を再生する手術を受けたが、このとき、医師のミスで内耳にウイルスが入り込み、突発性難聴を引き起こした。その後かなり回復はしたが、基準の半分ほどで、日常生活に支障はないものの、旅客機を操縦するパイロットとしての身体条件を満たさないことがわかった。

問題は、鼓膜の再生手術を行った医師が校医だったこともあって、ミスを学校がらみで隠蔽しようとしたことだ。ダイチの母親がそのうわさをキャッチし、徹底的に調べた結果、事実が明るみに出た。医師と学校は謝罪し、慰謝料も支払われたが、失われた半分の聴力は元に戻らなかった。その後、公立高校の普通科に進学したが、大学受験のためだけの勉強に実が入らず、次第に不登校となる。中学生のころからコンピュータをいじることは好きだったので、専門学校のほうがよかったかとも思ったが、遊星学館の存在を知ると、ここなら好きなことを勉強しながら、少し別の道も模索できるのではないかと感じ、自分で入校を決めた。ヒデもテン子も入校への道は親がつけてくれたが、ダイチはちがっていた。

三人について銅介が知っているのは、ほんの表面的なことだけなのかもしれない。実際にはもっ

と深い心の傷や、思うところがあっても不思議はない。生徒一人ひとりの不登校の詳細な理由は代表が把握しているが、直接指導に当たる鋼介は、最低限の内容しか聞かないようにしている。先入観をもたないようにするためだ。本人が自主的に話すときには、それこそじっくり耳を傾けるが、話したがないことを根掘り葉掘り聞き出すことは絶対にしない。正面から付き合うことによって、自然と理解するのが最良と考えていた。

代表室から戻ってくると、三人はおとなしく待っていてくれた。ただ、六つの目の輝きは、心なしか十五分前より増しているように感じた。わざとゆっくりと三人の顔を見回し、鋼介は口を開いた。

「代表の許しも得たし、すべてを話そう。でも、長くなると思うから、覚悟を決めて聞いてくれ」

大学二年の夏休み――

鋼介はアルバイトで貯めた金で念願のバイクを買った。中古だが排気量は二五〇cc。嬉しくなつて、すぐにツーリングの計画を立てた。大分県出身の鋼介は、まだ日本海を見たことがなかったので、目的地として新潟県を選んだ。そして、フェリーで佐渡まで渡ったのは、彼が専攻する民俗学の資料の宝庫だからである。二十歳を過ぎていたので、酒蔵を訪ねて土地の銘酒を味わったりもした。

その帰り道、国道一七号を走って新潟と群馬の県境にある三国峠を越え、群馬県新治村^{にい はる}にさしかかったとき、一人の小柄な老人を拾った。国道に面する食堂で一緒になった客で、猿ヶ京温泉^{さるがきょう}までバイクの後ろに乗せてくれと頼まれたのだ。ハイキングの帰りに一風呂浴びて帰るのだろうと思っていると、温泉場では降りずに寂しい山道へ入るよう言われ、あげくにいくつかの神社を回らされた。べつだん急ぐわけでもないし、どうせ通り道だからと、言われるままにバイクを走らせたが、薄暗いところに来ると背筋がぞくぞくした。漫画雑誌に出てくる子泣き爺を思い出したからだ。

その後、国道を南下して三国温泉郷の湯宿^{ゆしゆく}まで来たころには、すでに暮れかかっていた。すると、老人は宿代を出すから一緒に泊まっていけないかと言い出した。御礼のつもりでもあったの

だろう。鋼介は迷ったが、老人の行動に少し興味も抱いていたので、申し出を受けることにした。そしてその夜、純和風の古びた旅館の一室で、老人から思いもかけない話を聞くことになったのである。

老人は山中の神社で、石塔や石の祠を入念に調べていた。表面を亀の子だわしでこすってコケをはがし、湿らせたタオルをポンポンとたたきつけて、刻まれた文字を読み取っているようだった。現場でもなんの目的でそういうものを調べているのか聞いてみたが、相手は沈黙を守っていたし、風呂上がりに向かい合って夕食をとっているときに改めてたずねても、最初はうつむいたままビールの入ったグラスを口に運ぶだけだった。だが、鋼介が自分も民俗学を専攻しているので、田舎の石仏などを調べることがあると言うと、老人は初めて顔を上げた。そして、「どうせ本気にはしてもらえんだろうが」と前置きして、ぼつりぼつりと話し始めた。

「あんだ、徳川幕府の御用金埋蔵の話を知つとるかね」

「は？」

鋼介は予想もしなかった話題に驚き、ほろ酔い気分がいつぱんに醒めた。その話は前に雑誌かなにかで読んだことがあった。伝説なのに、大まじめに探している人がいるという内容だったと思う。群馬県の赤城山麓に埋蔵された金額は四百万両で、時価数千億円。途方もないホラ話だった。そんな金があったら、幕府はつぶれてなんかいはいはずだと、ばかばかしくなって読むのを途中でやめた記憶がある。

「わしはそれを探してるんだがね」

「まさか！」

しばらくは開いた口が塞がらなかったが、老人はそれを予想していたとみえ、半ば諦めたような笑顔を見せた。そして、少し声をひそめた。

「あまり人には話したことがないんだが、そもそも、わしがどうしてこんなことに関わるようになったか、そのわけも知ってもらわなくちゃならんだろうな」

老人の名は田丸耕蔵。たまる こうぞう一八九一（明治二十四）年生まれの七十八歳。住まいは県内たかさきの高崎市で、長年判子屋と文房具店を経営してきたが、すでに店は息子にあとを継がせて、自分は隠居の身だという。

田丸も若いころから赤城山の徳川の御用金の話は耳にしていた。明治の半ばごろから山麓の原野に住み着き、発掘を行っている人物がいることも知っていたが、どうせおとぎ話のようなものだろうと馬鹿にしていた。ところが、一九三八（昭和十三）年の秋のこと、突然、県内の在郷軍人に赤城山麓にある上越線の敷島駅しきしまに集合するようにとの通達があった。帝国陸軍軍人として二十代後半の数年を田丸は大陸で過ごしたが、現地で結核を患って帰国し、以後は療養しながら親の商売の手助けをしていた。身分は退役在郷軍人。病気はほぼ完治していたし、軍の命令でもあるので、とりあえず駆けつけてみたのだが、金掘りかねほりと聞かされて驚いたのはいうまでもない。

昭和十三年といえば、「国家総動員法」が制定された年で、時局は戦争に向かって突っ走り始

めていた。また、世界的に金の値段が暴騰していたこともあり、軍費稼ぎを目的としての発掘計画であることをはっきり知らされた。そのころ、赤城山麓の津久田^{つくだ}では水野義治^{みずの よしはる}が、大正末年に病死した父智義^{ともよし}のあとを継いで御用金の探索に取り組んでいて、すべては水野家に残された資料や言い伝え、発見した物証などに基づいて行われた。これを主導したのは、近衛文麿^{このえ ふみまろ}内閣のブレーンだった後藤隆之助^{ごとう りゅうのすけ}という人物で、赤城に見学に来て本人もその手応えを感じたのか、発掘を国家レベルで推進しようと、在郷軍人に動員をかけたのである。

初め田丸を含めた五十名ほどが集まり、掘っ立て小屋を建てて自炊生活をしながらの作業が開始されたが、次第に人数も増えて、最も多いときは百名近くにふくれあがった。しかし、田丸はこの発掘には一貫して懐疑的だった。納得できる根拠がなにも示されないばかりか、疑問を挟んだり意見を言っても、軍人ではないのになぜか現場監督を任されていた角谷^{かどや}という中年の男が、「命令通りに作業を進めればいい」というだけで、あまりしつこく迫ると張り倒されかねないようすだったので、徒労だとは思いつつも命令に従うしかなかったのだ。

最初に案内されたのは、なだらかな斜面を流れる細い沢を遡った雑木林の中で、数年前に粘土と石灰を混ぜた三和土^{たたく}でつくられた三間四方の巨大な亀の像が見つかり、それを割って掘り進めたという深さ五メートルほどの大きな縦穴が、ぽっかりと口を開けていた。ここが宝蔵への入り口だと説明され、宝蔵の高さは、侍が刀を真上にまっすぐ持ち上げたくらいだから、それを目安に掘るようにもいわれた。一〇尺、約三メートルというところか。とはいえ、まったくポイント

トが絞られていないわけで、いつゴールに行き着くか見当のつかないまま、やみくもに掘り進めるだけ。幸い、赤城の火山灰が堆積してできた土は、柔らかくて掘りやすく、しかも適度に粘性があつて崩れる心配もないので、作業はどんどんはかどつた。

結局、なんの発見もないまま年を越して、作業は昭和十四年の春に打ち切られた。世の中の情勢がそれどころではなくなり、在郷軍人のうち、若くて健康な者はかつての所属部隊に呼び戻されたからである。田丸は図らずも最初から最後まで発掘に加わつたが、縦横に掘り進んだ穴は、まるでアリの巣のようだった。三層から四層に重なり合つたトンネルの総延長は一〇キロ近くにもなり、一番深いところは地表から五〇メートルに達していたかもしれない。常識的に考えれば、いざというときに速やかに掘り出さなければならぬものを、そんな深いところに埋めるはずがない。（無駄なことをしたものだ）と、自らをあざ笑いながら赤城をあとにした田丸だったが、まさか二十年後にそこへ舞い戻ってくることになるうとは、夢にも思わなかった。

太平洋戦争中は、年齢も五十を超えていたし、地元で軍に徴用されて軍事施設の建設に従事するくらいで、再び戦場に赴くこともなく無事に終戦を迎えた。そして戦後、世の中が落ち着き、日本の高度経済成長が続いていた昭和三十年代前半に、ときどき新聞や雑誌で赤城山の徳川の御用金のことに取り上げられるようになった。戦後間もないころからずっと、現地では発掘ブームが続いていたからである。ここぞという場所に住み着いて長期間掘るもの、夜中に来て人の土地を勝手に掘る者など、その数は年間のべ数十人に達していた。

あるとき、たまたま手にした雑誌を見て田丸はおやつと思った。ある研究家が、赤城の御用金は兵法「八門遁甲」はちもんとうこうによって埋蔵されていると思われると書いていたからだ。家に古くから伝わる文書の中に、確かそんな言葉があった。押し入れの奥の柳行李を開けてみると、下の方から見覚えのある桐箱に入った巻物が出てきた。まちがいない。古代中国に起源をもつ「八門遁甲」の概要と、その由来について述べられていた。それは、三国時代の天才軍師諸葛孔明しよかつこうめいが、古来の兵法や占法を基礎に独自の工夫を加えてまとめ上げたもので、孔明はそれを実戦で使って名を上げた。日本には推古天皇の時代に百済くだらの僧観勒かんろくによってもたらされ、平安中期の漢詩人で学者だった大江維時おおえのせいめいや、陰陽師の安倍晴明あべのせいめいらが独自の考えを取り入れて日本風に再編した。日本で初めて実戦に使ったのは、南北朝時代の武将、楠木正成くすのきまさしげで、忍法の百地三太夫ももちさんだゆうや豊臣秀吉の軍師だった竹中半兵衛たけなかはんべえ、「慶安の変」けいあんの首謀者由井正雪ゆいしょうせつらがこれを学んだことなどが書かれていた。

田丸の先祖は越後長岡藩ながおかの家臣で、それがなぜ田丸家に伝わっていたかはわからないが、赤城の御用金が「八門遁甲」で隠されているのがほんとうならば、改めて調べてみてもよさそうだと思いはじめたのである。この兵法は、もともと戦いを有利に進めるための陣立ての方法なのだが、軍用金の調達や配備についても説かれていた。配備というのは、埋蔵も含まれるわけで、敵の目を欺き、味方の手に確実に渡るようにするための秘術が盛り込まれていた。ポイントは二点あり、まず、埋蔵地点へ導く物証、つまり目印になるものは「不動のもの」であるということ。「不動のもの」とは、自然物ではよく目立つ山や大木、大きな岩など。人工物は神社・仏閣のほか、石

の祠や堂、石仏など、宗教に関係したもので、長い時を経ても動く可能性がほとんどないもの
ことをいう。もう一点は、物証は複数置き、囃も仕掛けるということ。複数置くのは保険をかけ
るということ、囃は目くらましの役割を果たす。

一九六〇（昭和三十五）年ごろから、田丸は図書館で新聞や雑誌の切り抜きを漁ったり、赤城
山麓へ行っては古くから住んでいる人を訪ねて話を聞いたりした。まず驚いたのは、言い伝えや
物証類がやたらに多いことだ。その真偽を確かめるのにかなりの時間を費やした。

中には二十年前の発掘の際に知らなかった重要なこともいくつかあった。一つは、赤城山麓で
の探索が一八七三（明治六）年に始まっていることだ。考えていたよりずっと早い。そして、そ
のきっかけとなったできごとでも知ることができた。維新後まもないころのこと、中島某^{なかじま}という人
物が横浜の異人館を訪ね、「徳川幕府の御用金四百万両が、上州の赤城山麓に隠されている。自
分がその発掘の権利をもっているのです、それを五万円で譲ってもよい」と持ちかけたのだ。この
話に乗ったのはアメリカ人だった。蒸気機関で動く大がかりな掘削機械を使い、半年あまりかけ
て赤城山麓の数カ所を掘ったが、なにも出てこなかった。そこで中島を詐欺で訴えた。そのことが、
創刊もない日本初の日刊紙「横浜毎日新聞」の記事にもなっている。

赤城山麓に御用金が埋蔵されているというわさが全国的に広まったのは、まちがいなくこの
アメリカ人の発掘以後のこと。そして、明治の半ばごろになると、一攫千金を狙って山師のよう
な連中がわんさと押しかけてきた。ここからは田丸の推理だが、あとから来る者はつまはじきに

されるので、それらしい新情報を持つてくる。たいていは作り話か、どこかで聞きかじったうわさ話のたぐいで、中には、物証までねつ造して持ち込む者もいた。古井戸の底から黄金の家康像が見つかったとか、地中から「宝」という文字や、扇の絵を刻んだ岩が出てきたなどというものだ。「八門遁甲」では地中に物証を埋めることは絶対にしない。地中から出てくるものは最後のもの、ただ一つだ。

いかがわしい情報や物証が多い中で、一つだけ田丸が注目したものがある。赤城山麓に現存する不思議な大黒天像。それまで御用金の埋蔵と関連づけられることはほとんどなかった。最初の一つを発見したのは、棚下不動の滝の近くだった。不動明王が祀られている場所で、利根川の流れて削られてできた垂直にそそり立つ崖に、それは浮き彫りにされていた。最大の特徴は、右手に打ち出の小槌ではなく剣を握っていることだ。脇に「元治元年甲子年」と深く刻まれた文字があった。

大黒天はもともとヒンドゥー教の主神シバ神の別名で、破壊神、戦闘神だった。平安時代に最澄が日本に伝え、古いものには憤怒の形相をしたものもあるが、鎌倉時代以降、日本の大国主命と同一化して、頭巾をかぶり、大きな袋を担ぎ、打ち出の小槌を手にした福の神になった。では、幕末に彫られた像に剣を持たせてあるのはなぜだろう。なにか特別の意味があるのではなかろうか。

そう考えて一帯をくまなく探し歩くと、次々に「剣持大黒天」が見つかった。ただし、磨崖仏

は一体だけで、あとはすべて石の彫像だった。合計七体。四体を探り当てるまでは、明らかに囋（くわ）と思えるものもあって苦労したが、あとの三体は容易に見つかった。ある法則に気づいたからだ。像は柵下の磨崖仏を基点にして、北斗七星の形に並べられていた。すべて元治元年の作。元治元年は西暦でいえば一八六四年、明治維新の四年前である。

そして、それをつくらせたと思われる人物も特定できた。地元の旧家に残されていた文書から、その時期に江戸の日枝神社の神宮寺である観理院の高僧が、たびたび来村していたことがわかったのだ。現在の東京・永田町にある日枝神社は、別名山王権現といい、江戸城を築城した太田道灌の創建で、城の裏鬼門（西南）に建つことから、後に徳川幕府の直轄となっている。また、江戸で手広く商売をやっていた地元出身の材木商が、同時期に帰郷して僧と行動をとみにしていたことも判明した。江戸城で使用する木材は、築城以来ほとんどが上州産だったから、この人物もいわゆる御用商人として、幕府と深いつながりがあったのはまちがいない。

では、北斗七星の形に並んだ剣持大黒天像が意味するものはなにか？ あれこれ考えているときに、ふと思いついたものがあつた。赤城山麓に伝わる文書の中の一文だ。確か「七臣伏して大將軍を守る」とか「七臣に達スレバ分証揃テ茲ニ一將顯ハル」と書かれていたはずだった。北斗七星から導かれるものが北極星であることに、田丸老人もすぐ気がついた。ひしゃくの部分の先端にある二つの星の距離を、五倍延長したところに北極星がある。北極星、すなわち北辰は神が宿る場所だ。そこに重要なものが隠されているのではないか。田丸は測量器械を持ち込み、胸躍

らせてその場所をたどった。

赤城山の裾野は富士山に次いで日本で二番目に広い。利根川に向かうならかな西側の裾野は、かつては灌木やカヤが生い茂る原野だったと想像されるが、その一部に芳ヶ沢よしがさわという地名がついていた。太平洋戦争後に開墾が進み、奥まったところに養豚場があるくらいで、建物らしいものはほとんどない畑の中に、ぽつんと建つ神社を田丸は見つけた。北斗七星からたどるびつたりの地点。山の神を祀る十二神社だった。

（まちがいない！）

確信をもった。ところが、そこにはすでに先客がいた。同じ道筋をたどったかどうかはわからないが、十年も前に神社の地下を掘りつくした者がいたのだ。社殿は昭和三十年ごろに建て直したもので、けっして古いものではない。また、地元の古老に話を聞いてみたが、建て直しの工事のときになにかが見つかったという話はなかった。

田丸は落胆した。これまでの探索者よりはずっと目的のものを追いつめた自信があったのに、広げた網にかかった獲物はなかった。だが、自らを奮い立たせて、もう少し挑戦を続けることにした。すでに仕事はリタイアして時間はあるし、健康にも自信がある。そこで手つけたのが、幕末の幕府財政事情に関する調査だった。それを分析することによって、見えなかったものが見えてくるような予感がしていた。

慶応四（一八六八）年春の江戸城開城のとき、新政府軍は大坂の商人たちから多額の借金をし

て軍費を調達していたので、それを返済するために江戸城内に数カ所ある御金蔵の中身をあてにしていた。ところが、新政府軍の記録によると、城内の御金蔵はすべて空っぽだったとある。そこで、勝海舟に詰め寄ったところ、勝は「すべては小栗殿がご存じのはず」と言うだけだった。大政奉還前の最後の勘定奉行は小栗上野介忠順ただまさだったから、勝の弁明は通った。そこで、將軍慶喜に徹底抗戦を訴えて役職を罷免され、知行地の上州権田村ごんた（現在の高崎市倉渕村くらぶち）に引っ込んでいた小栗を新政府軍は追いつめて、結局そのことを聞き出せなかったのか、最後は斬首している。なぜ首を切ったかについては判然としない。大量の武器を準備していたことなどを理由にあげているが、事実には反するし、後に新政府は小栗を処刑したのはまちがいであったと公表している。表向きには御用金隠匿との関連は取り沙汰されていない。

御用金埋蔵の由来については、単に新政府軍との戦いのための軍用金ではなく、もう一つ別の説もある。それは、まだ幕府の崩壊までには間があった安政のころ、大老の井伊直弼が計画して小栗忠順が実行役を務めたというもので、開国によって日本の金銀が急激に海外に流出するのを防ぐための策だった。幕府関係のものだけでも緊急避難的に安全なところに移しておこうと考えたのだ。それが時局の変化によって目的が変わり、戦のための軍用金となったという。

いずれにしても、御用金埋蔵の伝説を信じる者は、御金蔵が空だったのは新政府軍が来る前にそれをどこかへ移したからだと言い、否定する者は、幕府の財政は逼迫していたのだから、なくてはあたりまえだと主張する。しかし田丸は、御金蔵の中身だけでは事の真相はわからないと考えた。

江戸城以外の場所にあった幕府の金を調べて、そこから類推してみてはどうだろうと。すると、想像していたよりはるかに多額の金があったことがわかってきた。

まず、貨幣鑄造所だった金座・銀座には約二十万両の金銀があり、すべて新政府軍が押収している。ほかに十七万五千両相当があったが、事前に持ち出されて、板橋宿まで運ばれたという話もある。

次に、戊辰戦争勃発のとき、大坂城には十八万両の御用金があった。大坂にいた將軍慶喜は、あわてて江戸へ逃げ帰ったが、御用金は軍艦奉行の榎本武揚えのもとたけあきが「富士山丸」で品川まで運んだ。同艦の艦長の日誌にはそこまで書かれているが、残念ながら、その先どうなったかはわからない。

また、重さ一六五キロの巨大な金塊が、幕末近くまで城内に何個かあったらしい。これは「大法馬金」ほうままたは「千枚吹分銅金」といわれるもので、その名の通り鑄つぶせば大判千枚、しめて一万両になる金塊だった。非常用の御納戸金おなんどきんとして四代將軍家綱のときに二十一個がつくられ、減ったり増えたりしながら幕末を迎えた。何個残っていたか正確なところは不明だが、明治の末ごろまでに水戸の徳川侯爵家に一個、本家の徳川公爵家に一個あったことはわかっている。

そのほか、埋蔵金との直接的な関係はないが、南北町奉行所を新政府に明け渡す際に、いわばへそくりのような金が一万両以上あったという。

さらに、田丸は決定的ともいえる事実を、ある作家の著書の中に発見した。江戸城の御金蔵番をしていた人物が二人、昭和の初めごろまで生存していて、幕府の役人の命令で御金蔵にあった

千両箱を夜な夜な少しずつ運び出したというのである。運んだ先は、隅田川縁にあった幕府の建築資材倉庫の「御竹蔵」^{おたけくら}だった。

ここまで調べ上げたところで、田丸は一つの仮説を立てた。

御金蔵が空っぽだったのは、やはり不自然というほかはなく、どこかへ移された可能性が高い。ただし、三百六十万両だの四百万両だのという金額は、あまりにも非現実的すぎる。あったとしても数十万両の単位だろう。だが、もしかしたら、当初は百万両単位の金を集めて隠す計画を立てていたのかもしれない。そして、ある時期から準備を開始した。埋蔵地へ導く物証の配置などだ。すべてがととのったところで、最後に御用金を運び込んで隠すつもりだった。ところが、思うように金が集まらない。そこで、最終的には計画を変更せざるを得なくなった。

計画変更の要因はほかにもある。新政府軍の東への進攻は、旧幕臣たちの予想よりずっと早かった。西郷・勝会談によって江戸城は無血開城したものの、各地での小競り合いは、すべて新政府軍の圧勝に終わっている。抵抗勢力の準備が遅れたためだ。

田丸が注目したのは、ここ上州で起こった新政府軍と旧勢力との小競り合いである。その舞台になったのは、赤城山より北方の、現在の片品村や新治村。となると、状況の変化に対応して、赤城に運び込むはずだったものを、さらに北へ移して埋蔵したとは考えられないか。それも、分散して複数の場所に。実は、その裏付けになりそうな情報を田丸はつかんでいた。調査中にいろいろな形で耳に入ってきたうわさ話である。

一つは、幕末に旧三国街道、現在の国道一七号沿いにある相俣あいまたの海戸かいえんじ寺まで、数十頭の馬で大量の荷物が運ばれてきて、馬が帰されたあと二、三日のうちに荷物が消えてしまったというもの。もう一つは、同じころに旧沼田街道、現在の国道一二〇号の片品村鎌田付近で、牛八頭を引いて山道へ向かう武士の一団が村人に目撃されていることだ。牛は木箱を振り分けに二個ずつ背負わされていた。まるで昨日のことであるかのような具体的な話が伝えられている。

田丸の確信はしだいに揺るぎないものになっていった。

（赤城山麓に残された物証の数々は、つまるところ、主なき家来のようなものだ。芳ヶ沢の十二神社の地下になにもなかったことは、それで説明がつく。また、中島某がアメリカ人に五万円で売ったのは、どこかで小耳に挟んだ計画段階の情報だったのだろう。それが多くの探索者の目を赤城に釘付けにし翻弄してきた。自分の分析が正しいとしたら、注目すべきは赤城より北の地だ。そして、まだ掘り出されないまま眠っているものがあると考えても不思議はない！）

チリリリリ、チリリリリと、壁時計が時を告げた。ミソサザイの甲高い鳴き声は七時だ。ダイニングルームに場所を移して話を始めてから、あつという間に二時間が経過していた。

「おっと、もうこんな時間だ。続きは明日にするか。あ、でも明日は土曜日だから、来週だな」
鋼介は腰を浮かしかけたが、三人の表情を見て途中で動きを止めた。そうせざるを得ない雰囲気だったからだ。男の子二人は口が半開きになっている。

「すつごいとしか言えないわね」

一瞬の静寂をテン子の言葉が破った。目は見開いてまんまるになっている。

「ホントの話、なんですよね」

ダイチがもごもごした口調で、やっとそれだけ口にする。

「もちろんだよ、作り話のはずがない」

ヒデはなんとか頭の整理がいたらしく、落ち着いた声で言った。

鋼介はゆっくりうなずきながら、無言のまま三人の顔を順番に見回した。腰は元通りに椅子の深い部分に収まっていた。

「コースケ先生、今日中に最後まで聞きたい」

いつもより少し遠慮がちなテン子の言葉に、ヒデとダイチも反応して、首を縦に細かく振っている。鋼介は視線を方々に走らせ、しばらく思案に暮れていたが、意を決して両膝をたたいた。

「わかった。じゃあ、九時をリミットとして話を続けよう。みんな、おうちに電話して、事情を説明して」

鋼介が促すと、生徒たちはスマホでそれぞれの家に連絡を入れた。そのとき、ダイニングのドアが開き、代表の須藤陽香が入ってきた。

「おやまあ、まだ続いていたのね」

「すみません。話が長くなって。九時までには終わらせますので」

鋼介が説明した。

「ほかでは聞けない興味深い話のはずだもの、そりゃあ途中まで聞いて帰るってわけにはいかないわよね。ところで、おなかは大丈夫？ ご飯が余っていたようだから、軽い食事を作りましょう」代表の言葉はいつも優しい。様子を見に来たついでに、厨房でなにかおいしいものをこしらえてくれるつもりだ。三人の生徒は満面の笑顔で感謝の気持ちを表し、鋼介は腰を浮かせて頭を下げた。

三人の電話連絡が終わり、トイレをすませて部屋に戻ってきたころ、大皿に盛ったおにぎり、野菜のたっぷり入った味噌汁が、湯気を上げながら四つのおわんに入って運ばれてきた。

「話の途中でもいいから、質問をしてもかまわないよ」

おにぎりを頬張りながら、鋼介は言った。話が一段落し、一息入ったこともある。すると、早速テン子から質問が出た。

「ねえ、なんで上州、群馬県なの？」

まったく同じ質問を、鋼介は田丸老人にしたことがあった。だから、田丸から聞いたこととほとんど同じ答えをテン子に返した。

慶長八（一六〇三）年、江戸に幕府が開かれて以来、上州は幕府にとって特別の地であり続けた。家康は上州の主要な城に譜代の家臣を置き、それ以外の場所を天領または旗本領とした。一説にこれは家康の参謀だった僧天海の入れ知恵だったといわれる。天海が江戸城の鬼門（東北）にあ

たる上野に東叡山寛永寺を建て、裏鬼門（西南）に以前からあった日枝神社などとともに、兵法学的理論によって江戸の町の守りを固めたことはよく知られている。また、家康が死んだ後の神号が「大明神」に決定していたのを、一年後に「（東照）大権現」に変更させ、江戸城の真北に位置する日光に東照宮を建てることを進言したのも天海である。上州を特別の地にしたのも、江戸に万一のことがあった際に、軍事的に有利な地形をもつ上州に幕府の本営を移すという、天海の考えが採用されてのことではないだろうか。

江戸時代の初めに、幕府が利根川の大改修工事を行ったのも、その計画の一環と思われる。かつては東京湾に流れ込んでいた利根川を、東向きに付け替え、現在の銚子市で太平洋に直接注ぎ込むようにすることによって防災効果を高め、同時に、一部に人工の水路が設けられた江戸川は、川舟による物資の輸送路となった。

「なるほど。昔は大量の荷物を運ぶのは舟が一番効率的だったから、海も川も。それで、江戸川と利根川をつないで、江戸と上州方面の輸送ルートを確保したんだね」

さすが、テン子はポイントをつかんでいる。

「さてと、先は長いぞ。腹が落ち着いて眠気がさすかもしれないが、眠ったら置いていっちゃうからな」

そう警告すると、鋼介はふうっと深呼吸をした。話はまだまだ続く。なぜ自分が田丸に代わって事を進めることになったのか、そして、どのような方法で第一のターゲットを追いつめるに至っ

たか。もちろん、不本意ながらそこでピリオドを打たざるを得なかった事情も、正直に説明しなければならぬ。さらには、あの額田史朗の背後にどんな人物が控えているのか、彼らがなにを目的として鋼介に近づいてきたのか、そのこともこの子たちの関心の的であることがわかつている。

一つ一つのことを反芻しながら、鋼介は言葉にしていっていった。いま自分は新たな局面に立たされている。これからなにをやるべきか、まだ自分でもはっきりと先が見えていないわけではないが、なにをやるにしても、過去に得た知識や情報、身の上に起こったことの意味をきちんと分析し整理しておく必要があった。

大学二年の夏休み、初対面の田丸老人から湯宿の温泉旅館で聞いたのは、徳川幕府の御用金が埋蔵されたのが事実ならば、それはこれまで多くの探索者で賑わっていた赤城山麓ではなく、同じ上州のもっと北の方ではないかとの結論に達したところまでだった。すっかり夜が更け、瞼が重たくなってきた田丸は、「続きは明日だ」と言って布団に入った。夜のしじまの中に一人残された鋼介は、夢の中にいるような気分だった。いままでみたこともないような壮大な夢。そして、その続きをみてみたいと思った。

翌日、とうとう田丸を高崎の自宅まで送っていく羽目になった。どうせ通り道だし、ある程度予測していたことだ。朝食のとき、あるいは途中何度か休憩をとり、茶店のようなところに寄ったとき、田丸は続きを聞かせてくれた。

「埋蔵金探しというのは、いわば昔の人との知恵比べだ。敵や無関係の人間に簡単に見つかっては困るし、かといって身内がなかなか見つけれなかったら、これまた意味がない。文書や絵図などの書き物で残すのも不用心だから、その場所をどうやって伝えるかということが、どうやって隠すかと同様に重要なんだよ」

なるほど、田丸は五年間の探索の体験で、そのことを実感したようだ。また、普通の探索者ではとうていわかり得ないところを、兵法「八門遁甲」の知識のある彼だからこそわかったということもあるだろう。ただ、彼もまだ次のステップへの途中だった。御用金が予定を変更して北へ運ばれたとした場合、埋蔵に関わった人物がいったいどんな手立てを講じたか。時間的な余裕のない中で、安全に埋蔵し、かつ確実に味方の手に渡る術^{すべ}。その謎解きに挑戦しなければならぬ。

第二段階で田丸が目をつけたのは十二神社だった。仮説通り、当初予定していた埋蔵地が赤城山麓芳ヶ沢の十二神社だったなら、それを次なる場所へ導く基点にした可能性もある。そこで、二万五千分の一の地形図を頼りに、県内北部をしらみつぶしに調べ回ったところ、数十社あった。十二神社の中には熊野神社の系統のものもあるらしいが、この周辺の山間部にあるものは、ほとんどが土着的な山岳信仰に基づくものと思われた。そのすべてを調べ終わったのが、ちょうど前日のことだったのである。結局、直接的な手がかりはつかめなかった。田丸としてはここでまた大きな壁に突き当たった感もあり、おそらくそれが、鋼介を相手にそれまでの調査の経緯を語る引き金になったのだろう。

もし、田丸から聞かされたのが、すべてがうまくいったあとの成功談だったら、それに感動したり興奮したりはしたかもしれないが、ただ聞き役を務めるだけだったにちがいない。自分の入る余地はないからだ。だが、ことはまだ途中の段階。それが、より鋼介を刺激した。子どものころからの人一倍旺盛な好奇心とチャレンジ精神に火がついたのだ。

夏の宵の長話は悪鬼を招き寄せると聞いたことがある。この際、悪鬼も味方につけてしまおう。鋼介は語りながら、自分でも驚くほどすべてを詳細に記憶していることに気づかされた。一度は忘れようとしたことなのに、ほとんど消し去ることはできなかったのだ。当然といえば当然かもしれない。能力の足りない部分を、時間をかけてありとあらゆる方法でカバーし、百年以上の時間を隔てて昔の知恵者との勝負に勝ち、田丸に代わって見事ゴールに到達したのを確信したのだから。

（「下」に続く）